

# 楽漢的「五十歩百歩」考

—「五十歩」と「百歩」・数値の差に着目して—

狭山ヶ丘高等学校 樋口 敦士

## 一 はじめに

故事成語「五十歩百歩」は孟子の故事として有名である。群雄割拠の中で覇道を推進する戦国諸侯に向けて王道を説いた孟子の対話に由来し、戦場における五十歩と百歩の逃走には変わりがないとする寓喩である。『礼記』王制によると、「古者以周尺八尺為歩、今以周尺六尺四寸為歩」とあり、当時の一步は現在の一五〇センチほどと解されている。現在、「五十歩百歩」は人口に膾炙しているが、果たして「五十歩」と「百歩」の差異についてこれまでどのように受容されたのか。本稿では当該成語における漢文教材の意義について考察する。

## 二 故事成語「五十歩百歩」時代背景

故事成語「五十歩百歩」は、魏（梁）の恵王のところに訪れた孟子との問答に見える。

梁恵王曰、「寡人之於国也、尽心焉耳矣。河内凶、則移其民於河東、移其粟於河内。河東凶、亦然。察隣国之政、無如寡人之用心者。隣国之民不加少、寡人之民不加多、何也。」孟子对曰、「王好

戰、請以戰喻。填然鼓之、兵刃既接、棄甲曳兵而走。或百步而後止、或五十步而後止。以五十步笑百步、則何如。」曰、「不可。直不百步耳。是亦走也。」

恵王は他国の状況と比較して、魏には民衆が集まらないことを危惧したが、孟子はこれを戦場の寓喩とした。「五十歩逃げた兵士が百歩逃げた兵士を笑うのはどうか」との孟子の質問に対し、恵王は「その歩数が百歩でないだけで逃げたことには変わらない」と答えるが、どこの国の実態も変わらないことを王自身に悟らせる。

中原を治めていた魏は趙、韓二国とともに紀元前四〇三年晋国から独立し、ここから戦国時代が幕を開ける。初代の文侯（魏斯）は李克、呉起、西門豹などの人材を登用して戦国初の覇を唱え、跡を継いだ武侯（魏撃）も領土を拡大した。三代目の恵王（魏罃）は前三四一年に馬陵の戦いで斉の孫臏に大敗し、その後は秦の商鞅にも攻められて安邑から大梁に遷都して覇権を失う。滝川亀太郎『史記会注考証』に

よると、孟子が恵王と対話したのは前三二〇年頃と推定されるが、当時既に暗君との評価が定着していた。国学者本居宣長は『玉勝間』巻十四において暗愚な恵王に向かって王道を説いた孟子の不見識を批判するが、大田錦城は『梧窓漫筆』三編（一八三九）で次のように評する。

梁の恵王の救荒の術は、戦国澆季といへども、却て周官の及ばざる所あり、河内凶なれば其民を河東に移し、其ある所の食に就て生活せしめ、又河東の粟を河内に転ぜしめて、河内の民の老稚の移し難きもの食とすとすなり。これは良法にして、恐くは魏罃の私智には非ず。周官の違意にて晋国伝来の旧政なるも知るべからず。孟子の五十歩百歩を以て規諷せられしは、治道の最上乘の教へらるゝには、左も有るべきか。

今日にも梁の恵王の如き準備をなす侯国あらば、有志の人と云ふべきなり。

ここでは敗戦を重ねたうえ、孟子の王道論にも耳を貸さず暗君と目された恵王にも民政への配慮があった点は当代の諸侯も真似すべきとの

指摘があり、一定の評価をする向きも見られる。

典拠『孟子』以降、漢籍における「五十歩百歩」

の用例を以下に取りあげる。北宋期、王安石が常平法を青苗法に改めようとした際に、范鎮は「且陛下疾富民之多而少取之。此正百歩、五十歩之間耳」と反論する

之。此正百歩、五十歩之間耳」と反論する

（『宋史』）。このほか、明の高攀龍「察其用心、何以異於五十歩笑二百歩」（『明史』）、清の陳忱「坐視君父之難、只算得五十歩笑二百歩」（『水滸後伝』）、また漢詩文には南宋の黄大受「有紙与無紙百歩五十歩（有紙と無紙と 百歩五十歩）」、姚勉「五十笑百歩

杖如横戈（五十 百歩を笑ふ 杖を曳くこと 戈を横たふるがごとし）」、清の乾隆帝「自笑同孟語 五十歩百歩（自ら笑ふこと孟語と同じく五十歩百歩）」などの異同が見られ、現在の中国の辞書には「五十歩笑百歩」（『漢語大詞典』・『新華成語大詞典』）と記される。

### 三 わが国における「五十歩百歩」用例

わが国における当該成語の用例には、室町時代の『太平記』巻三十九「変じ易き心は鴻毛より軽く、撓まざる志は鱗角よりも稀也。人数ならぬ小者共の中に、適一度も翻らぬ人一人有りといへども、其も若し禄を与へ利を含めて、呼出す方あらば、一日も足を留むべからず。唯五十歩に止る者、百歩に走るを笑ふが如し」とあるほか、江戸時代は諸書に散見される。

#### ① 林羅山『扨言抄』（一六二〇）

軍ノコクチニテ既ニ鏑ヲ合セントスル時百歩退ク者モアリ。五十歩ニクル者モアリ。退ク

処ハ同ジ事ナレバ、五十歩百歩遠近ニテ百歩ヲ難シ笑。

#### ② 山鹿素行『山鹿語類』（一六六六）

されば賄賂をうくるもうけざるも、唯だ五十歩百歩のたがひにして、是によつて道おこなはれ私やむと云ふべき所あらざる也。

#### ③ 山鹿素行『諸居童問』（一六六八）

学ノ道スデハ異トイヘドモ、程朱陸王トモニ、聖人ノ学ヲ失却スルハ同ジコト也。唯五十歩百歩ノ間タルベシ。

#### ④ 近松門左衛門『槍狩剣本』（一七〇九）

諸任がわざと心え、只一筋に御太刀を大事にかけ、前後をわかつたず落し程に物にさそはる心地にて、そこ共しらぬ山々を二三日はさまよひしが、漸夢の覚めたる如く、始て驚くかひもなし。此云わけは私ごと。五十歩をもつて百歩を笑ふとかや。逃るは同じ逃る也。

#### ⑤ 佐藤直方『学談雑録』（一七一六頃）

一学者ガ出テ堯舜ノ御代ニシヤウト思フテモ、何ノ事功モナシ。下手碁打ノ会合ニ強弱ハアレドモ、手ヲナラスニ至ラヌウチハ、五十歩百歩ナリ。学者ガココニ目ガツカヌ。

#### ⑥ 获生徂徠『弁道』（一七一七）

近世頗有下言宋儒之非者。而顧下其所レ為道德者上、則亦不出下言語講説之間、僅能削其已甚者、而稍傳以中溫柔之

旨云爾。吁終未レ免五十歩之謂哉。

#### ⑦ 太宰春台『文論』（一七三九）

有以小不是笑大不是者。則曰以下五十歩笑二百歩之類上。

#### ⑧ 五井蘭洲『瑣語』（一七六七）

余於是知先主之為人。与曹孫五十歩百歩也。夫二雄鼎争。先主智勇居二雄之下。而名望出二魏吳上者、但縁以下劉氏一復漢室也。蜀国無二劉氏一血路、則無二他伎備一入望亦無所帰。

#### ⑨ 三浦瓶山『閑窓自適』（一七七六）

孟子ヲ信スルコト、宋儒ニ同ジク、其書ヲ尊ブコト、論語ニ同シ。徒ニ論孟ニ書ヲ信シテ、六経ヲ非薄ス。我ヨリ是ヲ見レバ、五十歩ヲ以テ、百歩ヲ笑フノ類ノミ。

#### ⑩ 山本北山『作詩志毅』（一七八二）

徠翁、己レ文章ニ暗キコト此ノ如クニシテ、『護園隨筆』ヲ著シテ、附録ニ、伊藤仁斎・積玄光ガ文章ノ誤謬ヲ論弁ス。所謂五十歩ニシテ百歩ヲ笑フナリ。

#### ⑪ 大田南畝『徳和歌後万載集』（一七八四）

五十歩も百歩もをなじ足もとの  
よろりよろひと酔ひ給へかし（酒上不埒）

#### ⑫ 大田南畝『此奴和日本』（一七八四）

塩秀才日々娼門に遊び、青楼に上る。此の所を五十歩道、孟子にははゆる五十歩百歩の違ひとは、大恩寺前と観音の方の事知らぬ。

#### ⑬ 滝沢馬琴『三七全伝南柯夢』（一八〇七）

彼園花を娶るといへども、いまだ枕席を共にせず。是おさんが恩義をおもふにあり。しかるに今舞々の三勝とやらを伴はば、所謂五十歩、百歩のみ。

⑭ 滝沢馬琴『椿説弓張月』(一八〇八)

とても妻孥に後れしものを、けふ死ぬばとて、百歩を恥て、五十歩に駐る類にこそ、とおぼせし程に、潜に讃岐国に押わたり、

⑮ 滝沢馬琴『昔語質屋庫』(一八一〇)

もし前漢後漢に紛れんことを厭はば、漢末とも、季漢とも称すべきに、これを蜀漢と称することいよく、謂れなし。これ五十歩をもて、百歩を笑ふの惑ひなり。

⑯ 松浦静山『甲子夜話』(一八二四頃)

然るに後房に置く所の侍妾小玉の輩、唱歌起舞するには、皆戯場の歌舞なり。さすれば戯場の人を禁じて、その歌舞を為さしむ。所謂五十歩を以て百歩を笑ふに非ずや。

⑰ 小説家主人『しりうごと』(一八三二)

文宣王の称を上るならば、なぜ文宣王の賛にとは書かずして、『白虎通』にはゆる、大夫は人を扶達するもの、とある大夫相当の夫子といふ語をそへて、孔夫子とは書れたるぞ。王号のおくりなある人を、先生の称を以ていふこと、不敬ならずとすべきや。孔丘と称したると、ただ五十歩百歩のたがひのみ。

⑱ 寺門静軒『江戸繁昌記』(一八三四)

輜夫貴駿足一也、後夫凶也。以百歩笑五

十。以鞍二前輿、為雄。

⑲ 滝沢馬琴『近世説美少年録』(一八四六)

非如止宿せずもあれ、其席に連りて、猶云云と陳ずるは、五十歩をもて百歩を笑ふといふ、古語にも似たるべし

⑳ 齋藤月岑『武功年表』(一八四八)

文化中編輯せる大江戸春秋と題せる写本一卷あり。大凡斯編の体裁に肖たり。然れ共載る所委しからずして、完備の物とは見えす、余が撰も又漏にして、五十歩百歩の譏りを免れず、亦彼書には童謡俗謳の類迄載たり。

㉑ 西島蘭溪『統秋堂問語』(一八四九)

聖徳太子ノ辞ナリトシテ謀計云々ノ神託ヲ記スレバ。コノ託宣三ツナカラ。厩戸太子ノ神託ニ擬シテ妄作セラルルト云ヒケル。ソノ信ゼザルハ是ヲ得ルナレトモ。厩戸太子ノ詞トスルハ。ナホ五十歩百歩ノ問耳。

㉒ 会沢正志斎『読直毘靈』(一八五八)

同姓ヲ娶ラザルニモ一理アレドモ。一事ノ上ニ就テ言フコトニテ。大道ニ関係ナキ故。今論ゼス。同母異母ノ別アリト云フモ。五十歩百歩ノ差アルノミ。

当該成語は『孟子』に由来するためか、儒書にも多く引かれ、学派の違いに大差がないと解されるのが特徴である。その一方で「五十歩を以て百歩を笑ふ」型の一文が「五十歩百歩」に単語化され、近代以降には定着の様子が窺える。坪内逍遙『当世書生気質』(明治十八年へ一

八八五)「今から馳でいんでも五十歩百歩じや。少々のろく歩行かんか」、正岡子規『墨汁一滴』(明治三十四年へ一九〇一)「辛うじて扱び得たる者亦到底俳句界を代表し得る者に非ず。されど若し『新俳句』を取つて之と対照せば其差壹に五十歩百歩のみならざるべし」、夏目漱石『野分』(明治四十年へ一九〇七)「世の中を不愉快にする位な人間ならば、中野一人を愉快にしてやつたつて五十歩百歩だ。世の中を不愉快にする位な人間なら、又一日も早く死ぬ方がましである」、寺田寅彦『断水の日』(大正十一年へ一九二二)「或人の話では電気の絶縁の為にエボナイトを使つてある箇所を真鍮で作つて、黒く色だけをつけておいた器械屋があるといふ。これは恐らく唯の話かも知れない。併しそれと五十歩百歩のい、加減さは到る処にあるかも知れない」などの用例が見られ、こうした俗語化によりさらに幅広く使用されたことは想像に難くない。

四 「五十歩百歩」の差をどう読むか

当該成語「五十歩百歩」について、『広辞苑』第七版(二〇一八)には「少しの違いはあることとはあるが、本質的には同じことだという意」と記載されるが、この数差はどのように受容されてきたのか。明治末期の辞書には「少しの相違にて、大体に於ては同じきをいふ」(池田四郎次郎『故事熟語辞典』)、「甚しき差なきをいふ」(簡野道明『故事成語大辞典』)などである。

戦後、東洋史学者の貝塚茂樹は「量の差を無視して、ただ質だけを取り上げようとする観点には問題がある」(『世界の名著』3 孔子孟子)と指摘したが、こうした見解は大正新教育運動で活躍した澤柳政太郎の以下の文章にも見られる(明治四十二年(一九〇九))。

五十歩も百歩も退くは同じく退くのであるから同一である。少なくとも大なる差がないといふのは、誤つたことである。元來人間社会のことには絶対なるものは一もないのである。悉く皆相対比較的事物である。善といつても純粹の善といふものなく、悪といつても絶対の悪といふものではない。況して利といひ害といひ、得といひ失といひ、適当といひ不適当といひ、健全といひ病的といひ、幸福といひ災禍といひ、悉く比較的事物でないものはない。比較上よりいへば、五十歩百歩の差は大なるものである。五十歩と六十歩も大なる違ひである。

#### 〔退耕録〕

ここでは日常の行動において小善・小悪のこの些細な違いに注意すべきことが説かれている。大正二年(一九一三)には、早稲田大学出身の文学者東秀雄も歩数の差に焦点を当てている。

五十歩百歩の差が、孟子によつて無視されてから、何となく、程度の差といふ事が一般に閑却される傾向がある。強ち其れを悪いとは主張せぬが、程度の差といふ事が

閑却された時、差別的な世界たる現実界が、全然其意義と權威とを抛たねばならぬ。

(中略) 無論我々の理想世界は、畢竟これを平等観の世界に求めねばならぬ。と云ふ事に、誰も異存のあらう筈もないが、それだからと云つて、真実の平等観は、本来差別観を超越した所に建設されるべきものであつて、之を無視した所に求めらるべきものではない。

#### 〔シダモシタン〕

現実世界の数値の差を無視した中では真実の平等観は建設されないとの内容である。昭和二年(一九二七)に発表された随筆の中で、英文学者戸川秋骨は「翻訳業」について「五十歩百歩」を持ち出している。

何となればどうせ出来ない翻訳であるから、それが良くて、悪くても結局は五十歩百歩であるからである。もつとも物事の相違は五十歩百歩といふ処が大事なので、低気圧と高気圧との差は比較的僅少だし、体温は三十七度なら平温だけれども、それを三度越した四十度は大熱であるのだから、況んや五十歩百歩は大変な相違にちがひないが、それは場合に依る事で、何事も一律には行かない。

#### 〔翻訳製造株式会社〕

近年では門屋温も当該成語について「五十歩」と「百歩」を単純に「大差ない」と解すべきではなく、「程度の差はあつても本質的な違いはない」意味に捉え、受講学生にもそのよう

に説明しているとの報告も見られる(『五十歩百歩』は大差のないことか 漢文『故事成語』指導の問題点) 平成二十七年(二〇一五)。

当該成語においてしばしば数値の差は無視される傾向にあるが、上記の例ではここに焦点を当てたうえでこれを問題視している。このように定番の故事成語に新たな読みを加えてきたことも漢文教育の魅力となるはずである。

#### 五 まとめとして

本稿では故事成語「五十歩百歩」の受容状況を俯瞰した。もともとは「五十歩を以て百歩を笑ふ」型の一文であったものが、わが国では「五十歩百歩」といった簡略化により定着が見られた。近代以降、当該成語が広く普及する一方で、距離の長短を無視して良いのかと、改めてその論点を俎上に載せて再考している。現在、「五十歩百歩」は大差がない意義に用いられているが、こうした読み換えの経緯を知ることが故事成語を活かすうえで有効であろう。

魏(梁)の恵王の返答「是亦走也」からは本来歩数の差異に興味を見出だすことはできないはずだが、上記のように漢文教材は従来通りの一義的な読み固執すべきではなく、多様な解釈が試みられてきた点にも注目したい。普段無意識に使用している故事成語の世界に思いを巡らしてみることが含蓄深い読み方になるのではないだろうか。